図書館だより

vol.26
NO. 1
北海学園大学附属図書館報　第26巻1号(通巻169号)　2004.4.1
Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

2 古林英一
大学とは？

3 大谷通順
春節の来訪者

4 元木邦俊
いまどきの迷惑メール

5 鈴木美佐子
私の愛読書

6 福永　厚
パソコンとインターネットは必需品

7 使おう・借りよう・探そう
図書館利用ガイド

8 図書館用語のポイント
編集後記

大学とは？

文＝古 林 英 一
（ふるばやし　えいいち／経済学部教授）

新入生のみなさん、入学おめでとう！　そして、授業料負担者のみなさま、この不景気ななか、なかなかたいへんだろうと拝察いたしますが、これも因果と思し召して授業料の納付よろしくお願い申し上げる次第であります。

以前勤務しておりました北大で、ある年、私は最初のガイダンスをやらされました。そのときの教官向けのマニュアル（偉そうに訓辞垂れてても、実はちゃんとマニュアルがあったりするのです）に面白いことが書かれておりました。今はどうか知りませんが、新入生を集めた初っぱなに「わが北海道大学は本日より諸君を紳士・淑女として接する」と一発かますのです。これってどういう意味かわかりますか？　表向きは「君たちを大人として認めるよ」ということなんですが、実はこれには裏の意味があるのです。「大人なんだから、自分のケツは自分で拭きなよ。ワシらは面倒みんからね」という意味なのです。

では大人として、世の中をわたっていくのに必要なことってなんでしょうか？　そして、それは大学で教師が教えてくれるのでしょうか？　ここではこの二つについて私の思うところを述べようと思います。

先日、毎日新聞の夕刊に吉本興業幹部だった木村政雄氏のインタビュー記事が載ってました。そのなかで、氏は「「読み・書き・そろばん・ボケ・ツッコミ」ができれば世の中十分わたっていける」と述べておりました。私ははたと膝をうちましたね。まさに名言です。大学で学ぶべきことはこれに尽きるように思うのです。

もちろん、大学でお笑いを勉強するわけではありません。「読み・書き・そろばん」といっても単に文字を読んだり書いたりできるというだけでは意味がありません。たとえば、英語教育の重要性がしきりにいわれますが、実は英文を読んだり書いたりできるだけでは全く意味がないのです。何を読むのか、何を書くのか、流行のいいかたでいえばコンテンツが大事なんですね。

では「ボケ」とは何か。情報をどう提示するか、なのです。そして、発せられた情報を的確に理解し反応することが「ツッコミ」です。たとえば、学者の言説、政治家の発言、マスコミの報道、これらをそのまま受け取ってはだめなのです。「あんなこといってるけど、こういう見方をすればこういうふうにもみえる」と自分なりの判断を示すことが「ツッコミ」なのです。世の中答えは一つではないのです。

うまくボケるためには、そしてうまいツッコミをいれるためには、頭の引き出しをできるだけ大きくしなくてはなりません。私はそういうノウハウを大学の講義からつかみ取ってほしいと思うのです。

さて、後半の設問ですが、これに対しては「わが北海学園大学は君たちを本日より紳士淑女として接する」と答えておくことにしましょう。

春節の来訪者

文＝大谷通順
（おおたに　みちより／人文学部教授）

ごぞんじのように中国では旧暦の正月（「春節（チュンジエ）」）を祝う。ことしの春節は1月21日。この日から7日間が春節休暇だ。中国で多くの人々が正月を過ごすために帰省するこの期間、中国在住の教え子たちも続々と日本に一時帰国してくる。ことしは北京、上海、広州でそれぞれ働く3名のOBが、帰省のついでに私の研究室をたずねてくれた。

Gさん（2000年度経済学部卒）は北京の特許申請会社で通訳をしている。卒業後、北京理工大学で1年間の研修を受け、同級生の紹介でいまの職についた。在学中の印象ではちょっと柔和すぎる女子学生のように思えたが、がんばり屋の一面があることを再認識した。Sくん（2000年度法学部卒）は広州の法律事務所で営業兼通訳をつとめる。卒業後、1年目は北京広播電視大学と瀋陽大学、2年目は北京広播学院、都合3か所の大学をわたり歩き、中国語に大いに磨きをかけた。日本人にも中国人にも人望があり、競争の激しい現地で早くもヘッド・ハンティングにあっている。

Xくん（1994年度工学部卒）は帰国のたびに私の研究室のドアを叩く常連だ。八王子の小さな製造会社から派遣されて、いま上海郊外の工場で製品管理をしている。卒業後、北京外国語大学で1年間中国語を学んだあと、東京の貿易会社に入社し、5年あまりを河北省でのマッシュルーム工場の立ち上げに尽くした。その間、出張所の内紛、現地政府の圧力、労働者のサボタージュや放火などにさんざん苦しめられたあげく、ようやく生産が始まろうというときに、会社のずさんな経営がたまらずついに退社。取引先の親切な中国人経営者の紹介で、北京の日系繊維会社に移ったが、こんどは直接の中国人上司に疎んじられて1年ほどでやむなく退社。昨年の春、いまの会社に入った。

確かに彼には少しドジなところがある。在学中に中国政府奨学金留学生に応募して、せっかく工学部O先生の立派な推薦状のおかげで難関の1次書類審査を通過しておきながら（実はこれは学園大で空前絶後の快挙なのだ）、研究テーマについて十分に勉強しておかなかったために、はるばる2次面接会場の東大までいって試験官にこっぴどく叱られ落とされたのもそうだ。しかし彼は決して失敗にめげない。それどころか、何か失敗のたびに人間としてひとまわり大きくなっていくようにさえ感じさせる。そして何よりも貴重なのは、中国の大地とその上に暮らす人々に対する彼の親愛の情が、いまもまったく色あせていないことだ。こうしてみると春節ごとの学生たちの来訪は、私にとって彼らの成長を確認するよい機会になっているようだ。

ところで、彼らの成長には共通の契機がある。在学中に参加した北京理工大学での語学研修がそれだ。わずか1か月の研修にもかかわらず、彼らの若い精神はそこで大いに揺り動かされ、何かをかき立てられる経験をした。いまの彼らがあるのは理工大の先生方があるからだといっても過言ではない。

3人のOBが中国の職場に帰っていったあと、おととし語学研修に参加したばかりの初々しい3名の学生（2003年度人文学部卒、2004年度人文学部大学院休学、2003年度経済学部卒）が、新たに中国での留学に旅立った。彼女たちが先輩たちと同様にみずからの力で前途を切りひらいていくことを祈る。

いまどきの迷惑メール

文＝元 木 邦 俊
（もとき　くにとし／工学部教授）

以前（1996年夏）に“ネットワークを使おう”というタイトルで本欄に電子メールの利用などについて書いたことがあります。当時、豊平キャンパスにネットワークが導入された時期で、教職員、学生の全員が大学で電子メールを使う環境が整った頃でした。今では、電子メールは携帯電話での利用も加わって、当時以上に有効で重要な通信手段となっています。便利な電子メールですが、この頃はスパムと呼ばれる迷惑メールが激増しており、通常の電子メールでの通信に影響が出る状況も生じています。

スパム　SPAM　不特定多数のメール・アドレスを対象に、広告や嫌がらせのメールを発信すること。語源は、英国のコメディグループであるモンティ・パイソンにより演じられた「The SPAM Sketch」というコメディ。
［パソコン用語辞典（技術評論社）より抜粋］

インターネットで検索すると、このコメディのスキットはすぐに見つかります。Spam、Spam、Spam、Spam、…と段々と声を大きくして他の人の声をかき消していくことから、迷惑となるしつこい広告メール＝SPAMと呼び始めたということです。商標登録されているハム缶詰のSPAMを製造している会社からの抗議で小文字で書くことも多いようですので、以下では小文字にしておきます。spamは普通っぽい商品（デジカメやおもちゃ）から相当に怪しいもの（ネズミ講のようなものや処方箋なしの薬剤購入）、出会い系サイトの勧誘（携帯電話へのメールでは少し以前に大変問題になった）、spamではないとご丁寧に書いてあるもの、などなど、実にバラエティ豊かなものが送られて来ます。中には、“spam対策用ソフトはいかが”といったspamもあります（この宣伝効果はないように思いますが）。このspam、数が少ないうちは大して気にならず、むしろ面白がって見ることもある程ですが、1日に数十通以上となると事情が変わってきます。1通ずつ手動で削除していくのは大変面倒です。また、大量のspamに紛れて重要なメールを見落としたり、誤って削除してしまうといった実際的なトラブルの可能性も高くなります。大学のアドレスに来たメールを携帯電話に自動転送するような場合には、不要メールであっても課金されてしまいますから、仮に1通1円、1日50通だと年に18,000円程もspamのために払うことになってしまいます。これではたまらないので何等かの対策が必要となります。一番簡単なのはメールアドレスを変えてしまうことですが、長年使ったアドレスを変えるのは引っ越し並に大変なので、受信したメールがspamかどうかを自動判定しようということになります。日本の業者が出すメールでは、件名に“未承諾広告※”の文字を付けることが法律で決まっている（2002年7月から）ので、これを守ったspamは簡単に取り除けます。もっとも、このような順法spamは少ないようです。多くのspamは国外から、視覚的効果を狙ってHTML形式のメールで送られて来ます。この特徴で判定すると8割程は取り除けます。平文（普通のメール）で送られて来るものは、spamでよく使われる語（例えばmake moneyやviagra）が含まれているかどうかである程度判定できますが、送る側もよく考えたものでa→@、o→0のように似ている文字で置き換えたり（m@ke m0neyのように）、語中に無意味なハイフンやピリオドを挟んだりして簡単にspamと判定されないような工夫をしています。Spamの急増に対応して、2003年秋頃からspam対策製品が数社から発売されていますが、精度良く検出するのは難しいようです。

ネット上のどこかで一旦電子メールアドレスがspam請け負い業者に拾われてしまうと、spamが散発的に来るようになり、暫くしたある時期から急に増えます。“100万件の有効なメールアドレスリストたったのxx＄”といったspamも来ますので、メールアドレスリストが低価格で流通しているようです。メールアドレスを既に公開している場合は、spam判定の精度をあげるルールを追加していくしか現状では対策はなさそうです。これから新たに大学のメールアドレスを使っていく新入生の場合なら、自分のメールアドレスをインターネット上（ホームページや掲示板など）に出さないというのが最も有効なspam対策になります。「電子メールによる通信はジャンクメールで埋め尽くされて機能しなくなる」という予測があります。メール利用者の賢い対応で、このような予測が当たらないように願いたいものです。

私の愛読書

文＝鈴木美佐子
（すずき　みさこ／法学部助教授）

教員の研究室にはたいてい書籍があふれかえっている。新入生がやってくると、まずはそれに驚く。3年生になって初めて研究室に入ったというめずらしい学生もいたが、慣れてくると本の量ではなく、質に目が行くようになって「何かおもしろい本ないですか」といい始める。そんな中に「一番繰り返し読んだものはどれですか」と聞いた学生がいた。専門書を一冊、棚から取るのをやめて、「『大辞林』かな」と答えた。

正確には「読んだ」ものではなく、「手に取って見た」ものなのかもしれないが、筆者の部屋にある一番の愛読書は「国語辞典」である。たとえば「他山の石」という言葉を確かめるとき、筆者は（1）『大辞林』、（2）『新明解国語辞典』、（3）『大辞泉』の三冊を引く。

（1）には「自分の人格を磨くのに役に立つ材料。参考にすべき他人のよくない言行」とあり、（2）は「見てくれがよくなくとも、そのものの大成には欠くことのできない好材料」、（3）には「自分の修養の助けとなる他人の言行」と書かれている。

それぞれ少しニュアンスが違う。筆者がこの言葉を辞書で引いたのは、「○○さんを他山の石とします」とメールに書き、相手から「やはり○○さんのしたことをよくないと思っていたわけだ。語るに落ちるとはこのこと」といわれたからである。「他山の石」は「見習うべき手本」という意味ではない。

この言葉に関しては『大辞林』がもっとも適切に述べているように思える。『新明解』は一味違う。『新明解』については、10年ほど前、『新解さんの謎』（赤瀬川原平、文芸春秋社）で話題になったので知っている人も多いだろう。先に傍点をふった「辞書を引く」をちなみに「引いて」みると、「多くのものの中から必要なものを取り出す」とあり、「大根を引く」と同じ用法だと述べている。言葉の動き方をうまくつかんだ説明だなと感心した。

「他山の石」については『大辞泉』はちょっと舌足らずかもしれない。テーマを示してレポートや小論文を書いてもらうと「『広辞苑』によれば…」と書き始める人が複数いる。何も『広辞苑』が日本語のオーソリティというわけではない。言葉の意味はひとつではないし、言葉を言葉で説明することには限界がある。

筆者の担当する「論理学」の講義に「否定」の意味の説明という、本人は白眉と思っている回がある。「否定」という言葉は堂々巡りをせずに意味を確定することが難しい。難しいのは「否定」だけではない。「広い」と「大きい」を辞書で引いてみるとわかるが、一方を説明するのに他方を使っているものが多い。語の意味や他の語との違いを見つけようと思うなら、何冊かの辞書を取り上げて、その言葉の意味の広がりと重なりを捉えることを勧めたい。

図書館には研究室どころではない数の本がある。しかし、あふれかえってはおらず、整然とあるべきところに並んでいる。『新明解国語辞典』は2階の左手、ソファーの横の棚の下段にある。『大辞林』は3階のAVブースの裏側にある。実はこの稿を書くにあたって、筆者はカウンターで「辞書はどこにありますか」と訊ねた。北海学園大学図書館に実物があることを確かめたあと、隣りにあった『成語林』（故事成語やことわざの辞典）や『日本語大辞典』（古い版はなんと20巻）も眺め、ついでに「他山の石」と同じページにあった「蛇足」について知識を仕入れてきた。「蛇足」というのは、「余計なものをつけくわえてだめにしてしまう」というような意味だが、蛇の絵を早く描いた人にお酒を飲ませるといわれて、それを飲みたいがために急いで描いたときの話なんだそうである。もしも「語るに落ちる」、「白眉」って…と思った人がいたら、図書館に行って辞書を引いてみよう。

パソコンとインターネットは必需品

文＝福永　厚
（ふくなが　あつし／経営学部教授）

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。大学生活に期待を膨らませて準備をしていることでしょう。大学生活における必需品の一つとして、パソコンとインターネットがあります。授業で課せられたレポートやゼミナールでの発表の為の資料をパソコンで作成したり、インターネットを使った情報収集や電子メールによる教員や友人とのコミュニケーションに利用したりします。先のことですが、就職活動では様々な企業のホームページを見て会社の内容を調べたり、エントリーシートに登録したりもします。これらを支援するために大学には教育用コンピュータ実習室が設置されていて、朝から夜までコンピュータとインターネットが使えるようになっています。実習室を使って、文書処理や表計算処理、電子メール、インターネットについての基本的な操作が学べる実習授業や、学部によってはプログラミングやホームページ作成などより高度な技術習得を行う授業が開かれています。図書館においてもコンピュータによる蔵書検索や文献検索が行えます。

これら大学の設備を十分に使いこなして勉学等に活用していくことは勿論ですが、自分でパソコンを持つことも大切です。自分で持っていれば、自宅でも勉学に活用できるだけでなく、パソコンを自分で管理できるようになることが重要なのです。自分でパソコンを持てば、ハードウェアの基本構成や周辺機器、様々な記憶媒体、基本／応用ソフト、ファイル管理、インターネット接続など、パソコンについての基本的な知識が否応なく身に付いてきます。ワープロソフトの操作はできても、意外とファイルの概念がわかっていなかったりするのです。最近ではインターネット上で利用者のモラルの確立が不可欠になってきています。コンピュータウィルスの蔓延やクラッカーによる不正侵入、個人情報の流出、著作権侵害など、インターネットを利用したトラブルや犯罪が増えています。自分のパソコンがウィルスに感染しない、外部からの不正侵入を許さないような防御体制を確立することや、文章や音楽、画像の不正コピーをしないという著作権についての知識を持つことが必要になっています。社会に出たときには当たり前のようにコンピュータとインターネットを使いこなすことが求められますが、ネットワーク上の社会が日常社会と同様に、危険に満ちた社会となりつつあるので、それらに対処できる倫理を確立しておくことが必要なのです。

私の所属する経営学部1部では、学生全員が自分でノートパソコンを購入し、一般授業に持ち込んで活用したり、授業外での学習にも利用しています。新しく出来た7号館には、一般教室や廊下に情報コンセントと呼ばれる電源端子とネットワーク端子が備えられ、そこから自分のパソコンをインターネットに接続できます。また、経営学部では、今年度中にe－ラーニングソフトJenzabar（ジャンザバー）の利用を開始する予定です。e－ラーニングとは、コンピュータやネットワークを使った授業支援で、各教員が授業の毎回の講義内容や資料をネットワーク上に提示し、受講生がそれを見て予習／復習ができるようにしたり、教員とのコミュニケーションを容易にしたり、授業中に簡単なテストが実施できるようにして、学習効果を高めようというものです。いくら新しい設備を導入し教育を情報化しても、学生の皆さんが積極的に利用し、学習意欲を高めていかなければ効果は出ません。目まぐるしく変化していくIT社会に対応できる能力を身につけるために、積極的にパソコンとインターネットを活用していかなければならないのです。

7号館6階の廊下で、情報コンセントと無線LANを利用

使おう・借りよう・探そう

図書館利用ガイド

図書館利用案内を見よう！

「利用案内」では、簡単な図書館の使い方を、
たくさん載せています。

図書館を使おう！

たくさんの蔵書がある！

本館（豊平校舎）：文系中心、かつ一般教養

工学部図書室（山鼻校舎）：土木、建築、電子を中心

朝９時から夜遅くまで開館している！

インターネットが使える！

レポートや論文をゆっくり書ける！

文献が探せる＆手に入れられる！

文献を探すには、インターネットや公開検索（OPAC）を使ったり、テキストに載っている参考文献を利用するなど、いろいろな方法があります。

本学の所蔵する図書資料は、著作権の範囲内でコピーを取ったり、借用できます。本学にないものは、他の大学図書館や機関から取り寄せできます（レファレンス）。

詳しくは、サービス・カウンターに相談を！

本を借りよう！

・学生証と借りたい図書をサービス・カウンターに提出してください。

・貸出は5冊、15日間まで。
予約がなければ延長できます。

・返本は、サービス・カウンターにお出しください。
（業務終了後は、返却ポストに投函してください）

本を探そう！

・本館２階・３階、及び工学部図書室の図書は、自由に利用できます。

・書架に欲しい本が見つからない時は、OPAC（公開検索）コーナーで探そう。
閉架書庫にもあります。

「△△閉架」・「○○文庫」の場合、
または、見つからない場合

「図書・雑誌請求票」に記入して、サービス・カウンターへ申し出よう。

読みたい本、見たい本があったら

図書館に所蔵していない購入希望図書があれば、「備付希望図書申込書」に記入して、希望図書ポストへ投函、または、サービス・カウンターへ申し出よう。

情報を探そう！

●利用の前に、サービス・カウンターで申し込み手続きをしよう！

PC（情報検索）ブースを使う！

PCブースでは、インターネットとCD-ROMの利用ができます。本学のOPACになかったら、NACSIS Webcat（http://webcat.nii.ac.jp/）を使ってみよう。これは、全国の大学図書館の蔵書を調べるデータベースです。見つけた本の利用については、レファレンス・カウンターで相談しよう。

AV（視聴覚）ブースを使う！

AVブースでは、カセット・テープ、ビデオ・テープ、CD、LD、DVDなど館内貸出資料が利用できます。サービス・カウンター横にあるAV資料リストで見たいものを探してください。

なお、個人の持込利用はできません。

図書館用語のポイント

●公開検索（OPAC）
Online Public Access Catalog の略で、オンライン検索資料目録といいます。本学では「公開検索」と呼び、資料をデータベース化していますので、どんな資料が所蔵されているかわかります。

●参考文献
研究や調査目的のために参考となる文献資料。

●図書資料のコピー
著作権の範囲内で、コピーが可能。詳細は、係員に聞こう。

●レファレンス
参考業務ともいう。利用者の求めに応じて図書館員が資料の検索や提供などのサービスを行うこと。

●NACSIS Webcat
国立情報学研究所が提供しているWeb上での総合目録データベース。 全国の大学図書館が共同作成しているもので、どこの図書館が所蔵しているかを調べることができる。

●KWIC検索
単語の語尾がうろ覚えでも検索可能です。長い単語でなくても短く確実な単語部分を入力するとヒットしやすい。

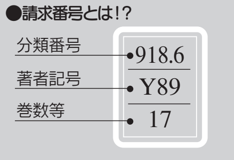
●書誌
個々の資料を識別できるように、著名、著者名、出版社などの事項を一定の方式にしたがって記述、配列したリスト。

●所蔵
OPAC（公開検索）など検索で、図書資料が所蔵されている場合、その配架、資料ID、資料状況、請求記号の情報。複本があると何件も表示される。

●配架
配置場所のこと。本学では本館開架、本館閉架、工学部開架、工学部閉架など。

●資料状況
利用可能か否かを表しています。利用できない場合は、予約手続きをしましょう。

●請求記号
図書資料の配架されている位置を示す記号。一般的には、分類番号と図書記号（著者記号）の組合せで表している。



●分類番号
日本十進分類法によって分類された番号。

●図書記号
同一分類番号を付与された複数の資料をさらに個別化するための記号。本学では、著者記号を使用。

●著者記号
著者を表す記号。著者の読み（カタカナ、ひらがな、ローマ字など）及びタイトル名から綴りの初字（１から３字）または数字との組合せでできています。

●開架、閉架
利用者が直接書架から自由に図書資料を選んで利用できる図書を開架図書、また、書庫内にある図書を閉架図書といいます。閉架図書の場合、係員に取出しを請求します。同じ図書が開架、閉架双方にある場合は、開架の図書を利用してください。

●予約
利用したい図書が貸出中の場合、予約をすることができます。

●希望図書ポスト
図書館に所蔵していない図書、欲しい図書は、購入希望を出してください。

●製本雑誌
雑誌類何冊かを綴じあわせて扱いやすいように一冊にまとめたもの。本学では製本すると貸出できます。

●白書
政府や地方公共団体が出す公的報告書

●目録
蔵書を検索するために書名、著者名、件名、分類番号などを一定の配列に編成したもの。

●奥付け（おくづけ）
図書の末尾にある書名、著者、発行者、発行年月日、定価等の記載されたページ。

編集後記

『週刊読書人』の特集記事で『ジョン・レノン レジェンド』（河出書房）の存在を知り、すぐさま本屋に走ったのは、たしか昨年10月頃のことです。あれから半年。温め続けたこの本をようやく完読しました。

ポールのソロ、ジョージの死、そして幻のアルバム『LET IT BE …NAKED』のリリース。ここ数年はビートルズにちなんだ多くの出来事があったように思います。

みなさんはビートルズが好きですか？

興味をお持ちの方は、図書館にあるOPACで検索をしてみてください。案外とヒットするものですよ。あるいは、全編をビートルズ・ナンバーが彩る『アイ・アム・サム』（視聴覚資料・DVD）などもオススメです。

北海学園大学附属図書館報　**図書館だより 第26巻1号**（通巻169号）
本館　〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号　**工学部図書室**　〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号
TEL（011）841-1161（本館内線）2273・2274・2275（工学部内線）7813・7814　印刷所：（株）アイワード